

エチオピア高原地域におけるサステナブル住居の開発に関する研究

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 環境デザインプログラム 三宅研究室修士課程

本間 暁子

本研究は貧困問題を抱えるエチオピアにおいて問題の一端である住環境の悪化をとりあげ、人口の9割が居住する高原地域を対象に、住民が自立して建設・管理を行えるサステナブル住居を開発することによって、エチオピアの住環境の向上を図ろうとするものである。

これを達成するため、2000年よりゴンダール市役所、北部ゴンダール区、エチオピア国立アディスアベバ大学建築・都市計画学部と慶應義塾大学三宅研究室が共同で進めているゴンダール市マスタープラン改訂プロジェクトに参加し、2001年から2004年にかけて6回計約4ヶ月の現地調査の中で多数の聞き取り調査及び実測調査を行ってきた。過去には密集市街地の住環境調査、対象地域に存在する住居タイポロジー調査を行っており、本年度は対象地域内の中世の都市ゴンダールに残る歴史的円形住居 (Ichegay Bet, 図1) の消失に関する調査・研究を進めた。



図1 円形住居

今年度は歴史的円形住居の消失に着目し、その消失要因を明らかにして、更に周辺環境との関係の考察からその主要因を見つけることを目的とした。これにより円形住居に関する数少ない研究として重要な見地を提供するとともに、現地に実行可能かつ効果的な対応策を示唆し、消失しつつある生きた建築遺産に関するケーススタディーとして貢献する。得られた知見は以下の通りである。また円形住居の発達、衰退過程を図2にまとめた。

<分布と起源>

1. 円錐屋根、円柱壁の乱石組積造の住居は、エチオピアではアムハラ州、ティグレ州に分布する。
2. 現地の原始的住居である円錐型の草の小屋を起源とするものと考えられる。
3. 屋内の補強構造は一本の木柱から木造の正方形の部屋へ、そして4本の組積の石柱へと変化してきたものと考えられる。

<消失と消失要因>

1. 円形住居はゴンダール市中心部では1940年頃を最後に建設されなくなった。
2. 主要因はトタン板の導入であると考えられる。藁葺屋根が一掃され、円柱壁は切妻屋根に適応して四角い平面へと変化した。
3. 新たに建設されないことで室内設備や建設技術が時代の進化に取り残され、悪循環に陥った。
4. 適切な補修方法が未確立であり、都市部への人口集中も伴い、現存の円形住居も消失していつている。

<円形住居分布地域における認識>

1. 円形住居は居住者、家主と地域住民から歴史的住居として目されている。
2. 国家及び地域行政も文化遺産として注目し始めており、2001年にはゴンダールにおいて保存に関する裁判が行われたが、積極的な施策を取るには至っていない。

円形住居は現在保存を考えるべき段階にさしかかっており、国家・地方行政も必要性を認識し始めているものの、具体的な対策は講じられていない。エチオピア国立文化遺産研究保存局 (ARCCH) の出張所をゴンダールまたは分布域内のその他の都市に設け、保存に向けた研究及び保存活動を行う体制を整える必要がある。

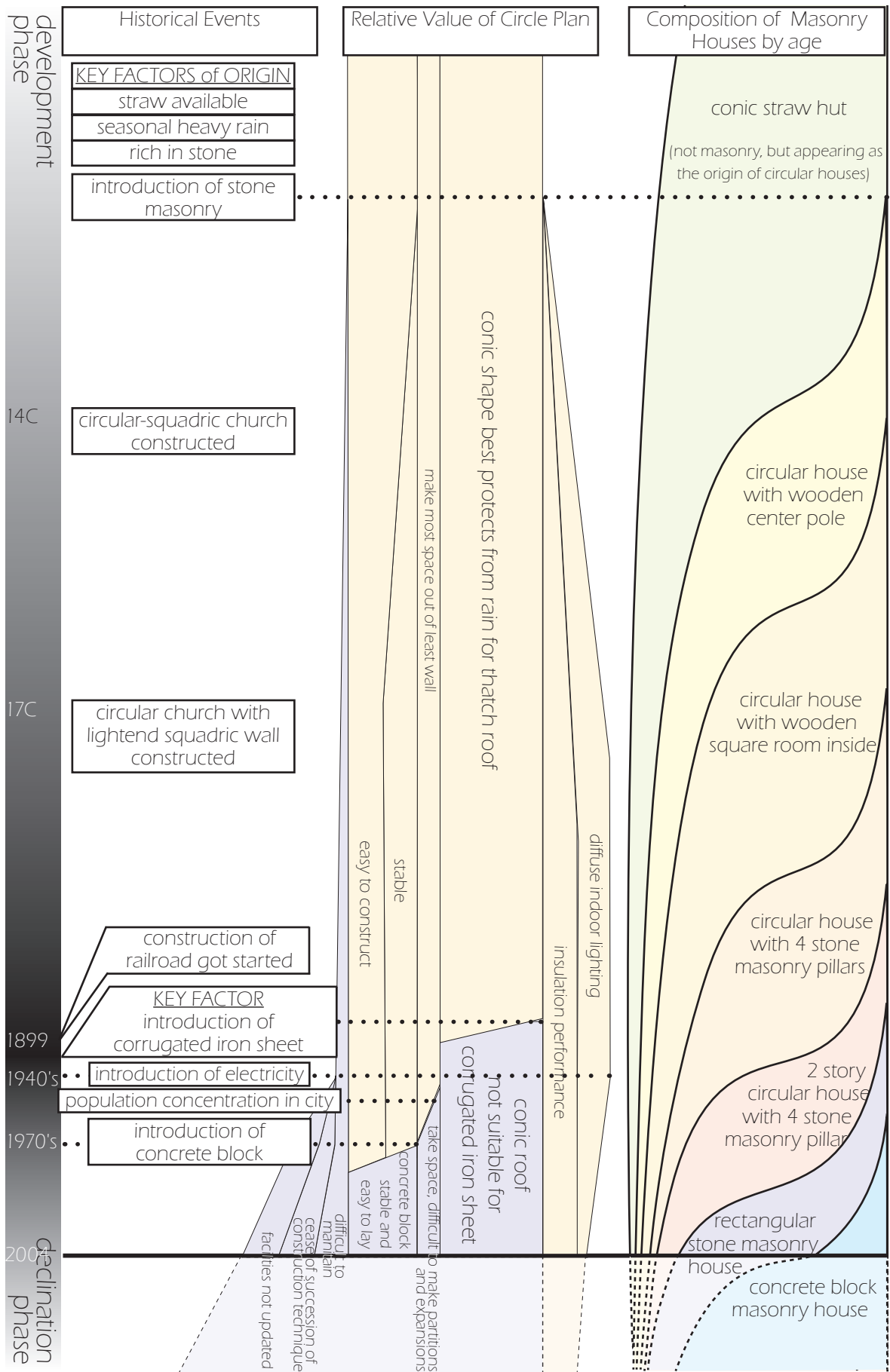


図2 円形住居の発達と衰退